

特集◆◆◆◆《海技の伝承》 救命筏の基礎知識

◆ 船員の命を守る ◆② 生き抜くために必要な「救命いかだ」の知識

洋上を航行する船舶には海難に遭遇した場合に備え、命を守るための救命艇や「救命いかだ」などが設備されており、万が一の不幸な事態を避けるため、救命いかだに関する知識は必要不可欠である

サバイバルで生還するための知識と技術 -航海中・漂流中の注意事項-

過ごした日数は、はっきり記録しておこう。このために特別の係を決めておくことが賢明。

漂流航海にあたっては誰でも、ほんの2～3日が1週間あるいは10日以上を過ごしてしまったような感じになるもの。今日が何曜日だったと1日中考えた末、頭の中が混乱して、救われる希望さえ失いがちなものである。

乗艇者の中で誰かが動く時計や携帯電話、スマートフォンを持っていたら貴重品である。大切に十分注意して水に濡れないよう心がけたい。陸地と通信できる距離にあるか、GPSで位置を確認できたり、知らせることができたりすれば、救助される可能性が高くなる。過ごした日数の記録、位置の確認、食事の時間、当直交代の時間の決定にフルに利用しよう。

時計や通信機器がなくとも、過ごした日数を紙に刻みこんでおくとかして、今日は何月何日か、何日過ごしたかをはっきりわかるようにしておこう。人間は何の目標もない海上では今自分はどこにいるのだろうということを、まず考えるものである。自分の位置がわからないことから全く日付の忘失と同じように、ふさぎこみ、あせりが生じてくる。

本船を離れた後リーダーは、航海の熟練者や権威者と十分に相談をして特に救命艇である場合は、本船付近において救助を待つか、陸地または一般航路筋への接近を試みるかという重要な決定をすることにせまられる。しかし、近代においては先に述べたとおり、通信設備と救難機関の発達に伴って、いたずらに移動することは、搜索範囲が拡大して救助を複雑化させるので、かえって遭難位置にとどまることが賢明である場合がしばしばである。移動の決定は情勢を慎重に検討する必要があり、そして、行動は必要以上に遅らせてはならない。この決定は、その理由を艇員に説明し艇員の自信を支え、支持が得られるものでなければならない。しかしゴムボートでは、自力による移動についてこの種の行動の決定はない。